
Muv-Luv 死亡フラグをぶっ壊せ！

胡蝶の夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v 死亡フラグをぶっ壊せ！

【Nコード】

N 4 1 4 2 L

【作者名】

胡蝶の夢

【あらすじ】

現実世界からの離脱者、その名は弑射刀。

そんなふうにかっこをつけながら日々ネットサーフィン
をしていた男、名を詩卸ししや 漢鯨かんけい。

ある日、自宅で眠っている彼を起こす声が・・・

予告編『俺の名前は東方不敗！！・・・いやウソっス』（前書き）

この話は予告的なものです。

最初の作品が完結するか、軌道に乗ってからの連載になります。

予告編『俺の名前は東方不敗！……いやウソっス』

起きるとそこは何もない空間だった。

「……は？」

意味わかんない、なにこれ？ 拉致？ 拉致ですか？？
……ならここは一発。

「知らない世か」君が詩卸君じゃな？」……」

御決まりのセイフにかぶせるKY参上。

「これこれ、KYはないじやろう」

「心読むなよ、ってかあんた誰？」

「ワシか？ワシは神じゃよ」

はいはい、ワロスワロス。

「信じておらんじやろ」

信じてますって、髪さまでs——「字が違っわ！」——
だから心よむなって、神（病）

「いや（病）って酷くないかの……」

だって普通こういう反応になるだろう？ 小説
じゃあるまいし……。

「せっかく転生させてやろうかと思ったのにのう」
「!?!」

転生・・・だと。

「おい、神（仮）。転生ってことは俺、死んだのか？」
「あ、ちよつと上がった。ふむ、確かにお主は死んだぞ。じゃがまだお主の寿命が残っておつての、なのでお主の希望の世界へ能力付きで送ってやろう」

マジかよ、なにこの二次創作のような展開。
おいしいじゃないか!?

「どうする？」
「行きます!」
「いきなり敬語か、変わり身はやいの〜」

神の言葉は基本スルーで、さっそく希望を言っていく。

「世界はマブラヴオルタで!能力は・・・」

そう言った瞬間、渡される12面ダイス・・・なに?

「願いの数はそのダイスをふって出た数だけ叶えよう」
「は？」

え、決まってないの? ってことは最低が1個、最高で12個の願いが叶うわけですか。
・・・リスクでかいな。

「どうした？早く振らんか？」

「クッ、そら！！」

カンッ、コロコロコロコロ・・・

「・・・」

予告編『俺の名前は東方不敗!!・・・いやウソっス』(後書き)

続きは連載始ってから・・・。

第二話『一度言ってみたかった、それだけさ!』(前書き)

お久しぶりです。

この小説は、私が書いているもう一つの作品、

『死んだ俺の神なる転生』の気分転換に書いている作品です。

なので投稿はかなり不定期になると思います。

また、作者はマブラヴファンですが、兵器にはかなり疎いです。

戦闘描写もド素人全開ですので、もし作品内での表現がおかしい、表現方法のアイデアがあれば、教えてください。

もちろん、普通の感想などもお待ちしております。

第二話『一度言ってみたかった、それだけさ!』

やあ、みんな久しぶり! 詩卸 漢鯨改め、紅 真叉斗くれないまさこだYO!!
いや、転生したのはいいけど、今俺、ザ・逃げを発動中。

喋っている暇がないので、デュエルモンスターズDM風に回想するZE

【回想】

「どうした？早く振らんか？」

「クッ、そら！！」

カンッ、コロコロコロコロ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

コロン《ダイス目 1》

「はー！1じゃ！1、お前も運がないのう」

「・・・・・・・・」

「じゃがこれは決まったこと、さあ早く願いw——」「何勘違いしているんだ」——ひょ？」

俺は顔を上げ、神（羽）を見る。

デー、デデデー→デデデー←（BGM：クリティウスの牙）

「まだ俺の運命は決まっていなせ！」

「何を言っておる、たった今お前の願いの数は決まった。行くべき世界か、新たな力一つか、それしか選択肢は残っていないぞ」

「ふん、それはどうか？」

頭に『？』を浮かべる神（と言う名の羽蛾）に俺はニヒルな笑みを浮かべる。

「いくぜ！ 俺のターン、発動！！ 願いは『叶える望みの数を2つにする』こと！」

するとダイスが輝き、代わりに星が二つ左胸に現れる。

「ふん、それがどうした。たった二つ願いが増えただけではないか。大方そうやって願いを増やすつもりじゃろうが残念、それには同じ願いは叶えられんぞ！」

「そんなことは想定済みさ、黙って聞いている！俺はさらに星を一つ使って発動、『もう一度運命ダイスを振る権利』をえる」

そうすると胸の星が一つ左手に収まり光る、その手には青色の1面ダイスがあつた。
神が焦る。

「ま、まさか!？」

「気付いたようだな・・・、俺は最後の星を使う、願いは『このダイスは必ず12が出る』だ!!」

願いは受理され、青いダイスが赤く変化する。

「いくぜ、ダイス・ロー————ル!!!!!!」

転がるダイス、……結果は12。

「くつ、ここまでk——」
「まだこれからだYo」
「NANI?」

「神よ……覚悟はいいか!」

「や、やめ」——「」

Y A M E N E ♪

【只今絶賛フルボッコ中（精神的）】

—— 一つ目の願い、『奇跡を起こす程度の能力』
『！』

ザシュツツ！

グファツツ！！

—— 二つ目の願い、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』
ズバツツ！！

ガハッ！？

——三つ目、『老いる事も死ぬ事も無い程度』
 『死を操る程度』
 ——！！
 ——四つ目、『

ズバババ、ザバンツツ！！！！

グツツ！ゲゲツツ！！

— 五、六、七、八 ———— !!

「ぐっ、ま、まだ、まだ終わらんよ！」

「いい覚悟だ……尊敬に値する。ではとく逝くがいい！」

[illegible]

「やめて下さい、とつくに神様のライフ（精神力）はゼロです！」
↑ 何処からかやってきた天使（神の秘書らしい）

「H A † N A † S E ♪ ♪」
↑
楽しい（特に抱きついてる天使さ
んの胸が／＼／）

ψψψしばらくお待ちください・・・ψψψ

「ではもう行く時間じゃの」

「ああ、ありがとよ神さん」

おれは暖かな光に包まれる、まるで天に昇るような気分だ。

「ああ、ついでに二つほど追加しておいたからせいぜい楽しんでこい」

そして俺は天にも昇るような気持ちのまま・・・落とされた。

「なんでじゃあああああ!?!?」

「それ『てんぷれ』というやつじゃ~~~~~」

「しーにーサーーらーせ~~~~ええええ・・・」

【回想終了】

で、落ちた先がBETAの大群のど真ん中、・・・ナニコレ~~~~。
。

「まあ、死なないけどね」

神様から貰った（ふんだくったとも言っ）能力を発動、その場から離れる。

ブフォン

「っと、脱出成功！ やっぱ便利だな」境界を操る程度の能力
「」

さて、一応安全圏みたいだな、ってかここ何処？
取りあえず日本みたいだけれど・・・。

周りにある戦術機の残骸が帝国軍カラーだったので日本だということとは分かっている。

遠くにはあのオブジェも確認できた。

「日本でハイヴって言ったら横浜か佐渡島だけ、ここが本土だとするならあれは間違いなく横浜ハイヴ。」

なら今は1999年・・・明星作戦か!!

「グオオオオオオ!!」

「うっさいわ!!」

バキッ!! グチャ!!

残骸の影から現れた戦車級、条件反射で殴ったら上半身飛んでった
wwwwww。

『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』半端ね〜。

「生身でBETA殺すって、どんだけチートなんだよ…………あ」

自分の最強加減に驚きながら振り返ると、・・・戦車級の群れ。

「うん、これ無理」

群がってくるBETAの攻撃を避ける俺、境界が開けない。

「一体どうすれば・・・あ！そうだ、これならいけるはず！-」

「ぶっつけ本番！『知識の中にあるものを創造する程度の能力』！
！」

そして俺はある機体を創造し、乗り込む。

「いくぜー！グリングラスト参式！！」

ドドドドドドドド……（地面が揺れる）

そう、俺はゼンガー少佐の搭乗機？のグリングラスト参式（斬艦刀装備）を創造したのだ！！
だってカッコイイじゃん！

「これに乗ったらセイフは決まってる！……」紅 真叉斗、押して参る！……」

そして、俺によるBETA殲滅の物語が始まった！！

第二話『一度言ってみたかった、それだけさ!』(後書き)

・・・やっちゃったZ E!

これ続くかな? ちよつと心配です。

あと、質問なのですが。

戦術機の大きさとどれぐらいか、分かる人いますか?
ネットで調べてるんですが、ぜんぜん分からんとです。

凄乃皇の説明で「全高は戦術機の約6・5倍(130m超)・・・

」
って書いてありましたが、そうすると大体20mちよつとぐらいで
しょうか?

教えてください つム) ボスケテ !!

ちなみにグルンガスト参式は60・2mだったよーノフ。グッ
タリ

第三話「オッシャー――行くぜ――!!……え!?!今回出番なし???

こにゃにゃちわ〜〜!!

気分が乗ったので続きかいてみますたあ〜〜♪

今回主人公空気、ってか存在してません。

時間的には主人公の転生前になるからです!

そこんところろすく〜〜。

第三話「オッシャー——行くぜ——！！……え！？今回出番なし???

S i d e : ? ? ? ?

「つく!?!」

私は地獄の中にいた、横浜奪還作戦通称「明星作戦」。

これに参加し我々A - 01連隊は部隊を三グループに分けそれぞれ前線に前線二個大隊、中間地点に一個大隊を配置していた。

最初は順調だった、レーザー級はほとんど現れず、帝国軍はハイヴ600mまで進軍、「このまま攻略できる!」作戦に参加した全ての人々がそう思ったその時、……それは起こってしまった。

「こ……これは!! HQ! 振動感知! 繰り返す、振動感知!! 確認を——!?!」

次の瞬間、前線と第二戦闘線の間にくつもの穴が開き、内部から悪魔が現れた。

「べ、BETA出現！ 間に入られて前線が孤立しています！！」

「つく、伊隅！ 坂口、川原と一緒に二中隊を率いてここの防衛に努めろ！」

大隊長、真蔵^{まぐら}乃^の 花代^{はなよ}は長年の経験に基づき、大隊各員に号令をかけ、そのままBETAへと突撃する・・・。

+++++

【BETA出現4時間後】

「つく、数が違いすぎる」

「伊隅大尉、このままではここも危険です。下がりましょう」

「駄目だ！ 大隊長達を見捨てるわけにはいかん、出来る限り踏みとどまれ！」

アレから数時間・・・、当初二個中隊だった部隊員も今は一個中隊と一個小隊にまで減ってしまった。無事な戦術機だけなら私、河原中尉、南雲中尉ぐらいだった。

弾薬も殆ど残っていない・・・仕方ない。

「隊の再編成を行う、被害の少ない機体で二個小隊を作る。呼称はα（アルファ）とσ（シグマ）だ！ それ以外の機体、特に間接系の中破、噴射装置の不備がある者は後退しろ！ 修理を終えるか、新しい機体に取り換えない限り戦線復帰は認めん！」

命令を受けると、最初は「最後まで戦う」と言っていた者達もいた、だが「この先のBETAとの戦いを続けるため、無駄に散ることは許さん！！」という私の言葉で最後は頷いてくれた。

「坂口少尉、お前も下がれ」

「そ、そんな！！ 伊隅大尉、私の陽炎はまだ戦えます。一緒に戦わせてください！！」

「……なにを勘違いしている。私は下がれと言ったんだぞ、後退しろとは一言も言っていないはずだがな？」（「」ニヤリ

「へ？」

「坂口、お前は撤退部隊の護衛をしながら補給してこい。その後補給コンテナを持って戻れ、いいな！」

「りよ、了解！！」

返事をし、下がる坂口機。

「ふふっ、酷いね〜みつちー。洋子ちゃん、気付いたら怒るよ〜」

「……いいのよ、あの子の機体も中は限界のはずだもの、と言うかその呼び名はやめて」

「いいじゃん、チョツとした息抜きだよ〜」(b、) ネット！

坂口少尉の乗る陽炎は表立った損傷は殆どない、だが間接よりも機体全体に歪みが発生していた。あれでは得意の連結機動に支障が出るどころか、機体の全関節部がほぼ同時に故障してしまうだろう。

「まったく・・・、もうすぐ編成も完了する、その時までには切り替えておけよ」

「了解」(、・ω・)ゞ”ビシッ！！

・
・
・
・
・

「大尉、編成完了しました！」

「分かった、α隊は私が、σ隊は川原大尉が率いる。各自、撤退した者たちが置いていった武器を集め分配しろ！」

・・・さて、これで一体どれほどの時間を稼げるか。

S
i
d
e

O
u
t

T
o

b
e

B
a
c
k
.....

第三話「オッシャー――行くぜ――!!……え!?!今回出番なし???

次回は頑張って絡ませよう、でもどうやって?

プランは未定さ!

んんん(・・)さん、いつも感想、ありがとうございます。

文才至らぬ身ではありますが、頑張って書いていきたいと思ひます。

第四話「シリアスは続く。だが紅、お前は駄目だ！ m 9（・ム）ドーン・

生・存・報・告！

いや、いろいろ書き直してたら時間がかっちゃったZ e！

ていうか、自分の書きたかった作品（ギャグ系）と、だんだんかけ離れてきているような・・・。

難しい時期です。

第四話「シリアスは続く。だが紅、お前は駄目だ！ m9（・D）ドーン」

【数時間後】

「きゃあああ」

「09！！ 大丈夫か、応答しろ！ 09！！」

「こ……ら……9」

「……こちら09、私は大丈夫です。しかし、機体は中破、各関節部に歪みが発生しており、操作できません」

隊を二つに分けていったいどれくらい経ったであろうか、20分？ 1時間？ 体感的にはもう5時間以上の気がする。

「分かった、09は直ちにバイルアウト、07の戦術機に乗り込め」

「09了解！」

「07了解！」

私、坂口^{さかぐち} 洋子^{ようし}の小队を率いて最終防衛線の500km手前まで後退を余儀なくされていた。

あれだけ掻き集めた弾薬も今は数えるほど、今は撃破又はバイルア

ウトした機体から武器弾薬を回収することでなんとか保っているけれど、そろそろ難しい。

「こちら07、09皆瀬の回収完了しました！」

「よし、比良野はそのまま皆瀬機からS-11を回収。カウント6でタイマーを設定し、前方のBETAに投げつける！！」

しばらくすると鳴り響く轟音と砂塵。S-11の爆発によって数万のBETAが蒸発、その数倍のBETAが爆風と熱風で行動不能に陥っている、俗に言う『入れ食い』状態だ。

「行動不能のBETAは無視しろ！我々はこのままα隊に合流する、全機続け！！」

α隊「」「」「了解！」「」「」

私たちはみちる達のいる場所まで移動しながらBETAを駆逐して行く。

S i d e o u t

? S i d e

「クソッ！　いったいどれだけいるんだよBETAめ！！」

「そんな荒れんなよ鳴海」

俺が小型種を36mmで撃ちながら言うと9　05・・・慎二から通信が入る。

平慎二、俺と同期で同郷。今は少ない男性衛士同士の悪友だ。

「分かってるさ。でもな・・・、俺たちの故郷でワラワラと出てくる奴等を見ると、どうしてもな・・・」

平「それは俺だって一緒さ。でもな、冷静さを欠いたら・・・死ぬぞ」

慎二の言葉で幾分か頭が冷えてきた。・・・やっぱお前がエレメントでよかったよ。

「ふう・・・。すまん、もう大丈夫だ」

平「本当か・・・？　声が強張ってますぞ旦那？」

「お前はいつの時代の人間だ？　まったく・・・！！」

軽口を言い合い、少しだが落ち着くことが出来たその時、警報一緒に自立制御が作動し、俺の機体は一気に上空へと飛び上がる。

「い・・いつたい何ぐあ!!??」

いきなりの機動によるGに耐えながら、何とか状況を確認しようとしたと同時に機体がいつそう激しく揺れ、俺たちが先ほどまでいた場所に幾つもの白い光が注がれていた。

《ガゴオオン・・・》

「くっ、レ、レーザー級（光線級）だと?！」

川原「聞こえるか!σ隊はそのままα隊を目指しながらレーザー級を出来る限り打ち減らすぞ!比良野は回避を優先、皆瀬と共に必ず生き残れ、いいな!!」

σ隊「「「了解」」」

ああ、こんな所でくたばってたまるか!!

S i d e o u t

川原S i d e

クソッ！こんな所でレーザー級が出てくるなんて、部隊はさっきの攻撃で散り散りになり。今私と合流できたのは07比良野機と05平機。04鳴海機が離れた場所でBETAに囲まれている。

「平、比良野」

平・比「はッ！」

「私はこのまま鳴海機の救出に向かう、お前達はα隊の所へ向かえ」

平「そんな！？」

比「単機でなんて無謀です！」

「そうです、せめて俺が！」

「馬鹿者！！」

二人「！？」

「α隊との合流が私達の重要事項だ、しかも比良野少尉の機体には皆瀬少尉が乗っている。それでは比良野少尉の機体はいつもより動きが制限される。」

私の言葉に黙り込む三人、そんな彼等に私は表情を若干緩める。

「心配するな、鳴海を連れてすぐ追いつく」

平・比・皆「「「・・・了解」「」

「よし（死ぬなよ鳴海！）」

S i d e o u t

鳴海 S i d e

「っクソ！やられた・・・」

先ほどの光線を回避したが噴射装置をかすり、着地に失敗。横たわった機体の上半身を何とか起こして36mmを連射しながら体制を立て直す。

「左噴射装置が被弾で足ごと破壊、右の装置は噴射剤が残り僅か、駆動系にも障害で動けない・・・絶望的だな。」

？「・・・こ・・・ら・・・か・・・」

「ん？」

通信が入るが感度が悪い、さっきの衝撃でイカレタか？

川「こちらσ01！！ 04・・・鳴海！聞こえているなら応答をしろ！！」

「！！川原大尉！」

現在地から約150m先に現れる隊長機。二丁の36mmで道を開きながらこちらへ向かってくる。

川「鳴海、無事だったか！今そこへ来ないでください！！」！？」

「大尉、早くこの場から退避してください」

川「な！何を言う？！」

「自分の不知火は、駆動系の故障で上半身しか動きません。同様にハッチも歪み、ベイルアウトも不可能です」

川「なら、私が今すぐハッチを挟じ開けてやる！」

「ダメです！BETAに囲まれているこの状況では、その前に二人ともやられてしまいます！」

「自決装置を起動させます。大尉は早く退避を・・・」

川「馬鹿を言うな少し待て！今すぐ——《ビー、ビー！！》——
——！？！——」

なおも、こちらに向かってくる大尉がブーストジャンプ行つたその瞬間、機体に急制動がかかり、その瞬間、いくつもの光線が走る。

《ガシュン！》

川「つく、レーザー級か・・・待っている今いm」大尉！避けてください！！」ッな！？」

Side end

川原Side

比良野達と別れ、少尉のマーカ―地点へ急ぐ

《ブロンッ、ブロンッ！》

「つく、邪魔だああああ！！！」

《ダダダダダダ！！》

「GUUUUUUU・・・」

ブーストジャンプを繰り返しながら着地点周囲のBETAのみを刈り取る。

「こちらσ01、04聞こえるか！」

返答なし、だがバイタルは生きている。・・・通信機の以上か。

「こちらσ01！！ 04・・・鳴海！聞こえているなら応答をし
ろ！！！」

鳴「！！川原大尉！」

数度目の通信で鳴海少尉から応答があった、やはり通信機の異常で
長距離の通信が出来なかったようだ。

「鳴海、無事だったか！今そこへ来ないでください！！！！？」

鳴「大尉、早くこの場から退避してください」

「な！何を言う？！」

鳴「自分の不知火は、駆動系の故障で上半身しか動きません。同様
にハッチも歪み、ベイルアウトも不可能です」

少尉の不知火は上半身を起こし、120mmと36mmで何とかB
ETAの進行を食い止めていたが、その範囲もだんだん狭ばって来
ていた。

「なら、私が今すぐハッチを挟じ開けてやる！」

鳴「ダメです！BETAに囲まれているこの状況では、その前に二人ともやられてしまいます！」

鳴「自決装置を起動させます。大尉は早く退避を……」

「馬鹿を言っな少し待て！今すぐ——《ビー、ビー！！》——
！?!」

少尉の元へ行くため、三度ブーストジャンプ行ったその瞬間、機体に急制動がかかる、その瞬間、いくつもの光線が走るのが見えた。

《ガシュン！》

「つく、レーザー級か……待っている今いm「大尉！避けてください！！」ツな!？」

少尉の言葉を聞いた瞬間、私の網膜投影に映りだされたのは、長い触手。

「（フォート級）」

そう、それは確認されているBETAの中でも最大級の大きさを誇る存在、要塞級……。

「（は、早く回避を）」

無理だ、私の機体は今、自立姿勢制御（受身中）だ。動くことが出来ない。

それらの思考が瞬時に行われる間、目に映るソレのはゆっくり・・・（とこちらに向かい、搭乗ハッチに当たる。

「あ・・・」

そんな、間抜けな声が、私が発する最後の声となった・・・。

S i d e o u t

鳴海 S i d e

《グゴオオオオン！！》

「た、大尉iiiiiiii！！」

今、俺の目には要塞級フォートの触手に貫かれ、力なく膝をつく川原機が映し出されていた。

「大尉、返事をしてください！大尉！！」

分かっている、この通信も無意味だってことは。頭では理解しているんだ、でも……。

「大尉、川原大尉——！！！」

網膜に映る要塞級は、そのまま触手を振り、大尉の機体をまるでゴミのように振り落とす、その前には突撃級の軍勢がいて、落とされた不知火は、そのまま踏み砕かれた。

「！！……つく、この、クソBETA共がああああ！！！」

俺はありったけの弾をBETAに撃ち込む、それと同時に自決装置のタイマーも機動。

20

・

19

・

・

・

「クソッ、クソッ、クソ野郎——」

11

・

・ ・ 8 ・ ・

「一体でも多く、貴様等を道連れにしてやる！」

俺の、平や水月、遥の故郷を・・・

3 ・ ・ ・ 5

俺たちの全てを・・・

「返せ————！！！」

2

すまねえ、水月、遥。お前らへの返事、出来なくなっちゃった。

1

出来ることなら、生き残って、平和になった世界で……

0

生きてくれ

• • • • •

《ドゴゴゴゴガガンンー！！！！》

S
i
d
e

e
n
d

第四話「シリアスは続く。だが紅、お前は駄目だ！m9（・D（ドーン

紅「よう、皆！俺のこと覚えているかな？」

紅「そう！この作品の主人公、紅真叉斗だ！」

作「どうしたいきなり？」

紅「どうしたじゃない！なんで俺が出てこないんだ！！」

作「え？だって、今はマブラヴ世界の住人がシリアスやってるし・
」

紅「じゃ何のために、俺はグルンガストに乗ったんだよ！いい加減
腰痛いよ！」

作「だって、お前入れたら鳴海助かるじゃん」

紅「・・・だから？」

作「いや、原作開始後の水月&遙がハーレムに入らな——「フルブ
レット44リボルバーマグナム！」——グヴァー！！？」

紅「そんな・・・」《ガンダイヴァー！！》

作「グヴェー！！」

紅「ことより・・・」《ショットガン・エアシュート！！》

作「ナヌバ?!」

紅「俺を・・・」《ハンマー・コック》

作「や・・・やめ・・・」

紅「出せー！ー！ー！」《紅マグナム！ー！》

作「まさかのオリジナル！??！」《バタリ・・・》

紅「これが俺の切り札だ」
ジョーカー

次回もお楽しみに♪

第五話「シリアスはあまり続かなかった」(前書き)

ぐだぐだしそうなので、さっさと終わらせます。

主人公は久々の出番で張り切っております！

第五話「シリアスはあまり続かなかった」

戦乙女の卵達が戦っているまさにその時、我等が主人公紅真叉斗君はというと・・・。

「ヒヤッハーーーーー!!」

・・・ハッスルしました。

【紅Side】

良い子のみんな！紅い〜〜、真叉斗だよ〜〜！・・・ごめん、古いわ。

気お取り直して、俺は今スーパーロボットの凄さを肌で感じている所さ！

《ガシガジガジ…》

「効かん！《ズシンッ！》」

群がる戦車級を踏み潰し。

《ブロン、ブロン！》

「遅いぞ、うすのろ！さあ受けてみよ、我が拳を！」「ドリル・ブー
スト・ナックル！！」

要撃級の攻撃を回避しながら、その前腕突起に合わせるように、己
の拳をぶつける。すると一瞬拮抗するが、すぐに螺旋の拳が打ち勝
ち、ヤツ等を削り風穴をあける。

《ドドド・ド・・・》

「多ければ言い訳じゃねえ！消えろ！」「オメガ・ブラスター！」

突撃級の群れに向かい放つ広範囲ビームによって穴を開ける。

《チュワワジュン！！》

「付けてて良かったビームコート！ってな」

奥に光線級を駆逐する。

「やっぱり最高だな、スパロボ万歳だ　ピピピ・・・　ん？」

性能を確認しながらハイヴへ向かったとき、グルンガストのセン
サーが何かを捉えた。

急ぎ反応した場所へ向かうとそこには大きな穴があった。

「お、ラッキー。これでハイヴに入ることが出来るぜ」

それはBETAが出入りし、また戦術機が進入するための目標となっている地点。

ゲートだった
門

【ハイヴ内】

ハイヴへ潜ること数十分？

現在ハイヴの下層近く、目的地へと到着したのはいいんだけど。

「しかし困ったな・・・」

俺は目の前の光景に少々困惑気味だった、なぜなら。

「・・・脳多くな？」

そう俺は今回、鑑純夏を回収しようと思っていたのさ。

俺の「知識の中にあるものを創造する程度の能力」と「情報を検索し知識を記録する程度の能力」を合わせれば脳を殺すことなく、反応炉から切り離すことが出来る。

そして再生させることだって可能だ、そう考えてこの部屋に来ただけだ・・・。

そこには一面に機能している脳達があつた。

「おいおい、なんでこんなに生きてるんだ？ 原作じゃあ生存者は一人だけだろう？」

あれか？アメリカが撃ったG弾のせいで、この脳髄sは『鑑純夏』以外死んだのかよ・・・。

「アメリカ最悪だな・・・まあ、スキマに入れば数は関係ないか」「それじゃあ早速——」「ザ・ザザ・——？」

「こちらHQ、各員直ちに戦線より離脱せよ！アメリカよりG弾が発射された！繰り返す・・・」

アメリカくくくく！！テメエら米のくせになにやってんの？！米より麦やトウモロコシ栽培してるくせに、漢字ではさも「我々ハ、コメ大好きデくくス」見たいな空気出しながら米国って表示されるくせに、ほんとになにやってんの？！

クソ、ODL生成装置と循環装置は現在4機助けられるのは。

「4人が、これは感だな・・・すまない」

俺はその場にある脳達に謝りながら、近くにあった四つの脳髓に装置を取り付けスキマの中へ送る。早く脱出しなくちゃ。

「上へ・・・角度・・・よし、いけ！「オメガ・ブラスター！」」

轟音を響かせ内側から外への道を作るり、一気に飛び出した。

「脱・出！つて・・・」

ハイヴから飛び出し着地した俺の足元には大破し、上半身と顔のみになった不知火、操縦席は無傷のようだ。

「生体反応は・・・ある！」

急いで不知火を回収しようとする警報が鳴り響く、レーダーには飛来するG弾が映し出されていた。

「チッ、こうなったらもう一発、撃て！「オメガ・プラス」——」
「キュウウウン……」——な？！」

ここに来ていきなりのトラブル、出力が上がらない。

「クソッ、動力系まで……このままじゃ」

一体なにが起こったのか、いきなりプラズマリアクターの出力が下がり、動かすことが出来なくなってしまった。

ここまできて、と色々と操作するが一向に回復しない。
刻々と迫るG弾を見て諦めかけたその時、データが送信される。

「ポイント、W175。N57。へ、スキマによる転移を行ってください」

「な、何だこの通信は、……でも」
「やるしかないよな！」

俺は数字を頭に思い浮かべ、機体の足元にスキマを作る。

スキマがグルンガストと不知火を飲み込んだ少し跡に、漆黒の闇が横浜を飲み込んだ。

第五話「シリアスはあまり続かなかった」(後書き)

ははは、やっぱ時間かかるね。

投稿して文章の表示がおかしい時があるようなので、その時は一回消すかもしれません。

第六話 「神様だって生きている」(前書き)

生・存・報・告！

いや、長らく空けてしまい申し訳ありませんでした。

20話ぐらいまで書き溜めようとしてたんですが、PCがウイルスに感染、データがすべて飛んでしまいました。><、

15話ぐらいまで書いていたのでそのショックは大きく、モチベーションが上がらない病を併発してしまい、しばらくかけませんでした。

今は薬(という名のアニメ・漫画観賞)を服用しながら何とか書き直している最中です。

もともと更新が不定期なのにさらに時間がかかりそうで怖いですが、これからもがんばって書いていきたいと思います。

第六話 「神様だって生きている」

【空】

くそ、スキマから出たのはいいけれど、今度は空の上かよ！

「早く立て直さないと・・・ッッ」

動力は・・・よし！飛行可能だ

「姿勢制御開始、ブースト・・・オン！」

《ゴゴゴゴゴゴゴ・・・》

「ぐううー!!」

なんとか空中で静止、周りを見渡すが一面の大海原だ。

一体誰があ通信を？索敵をかけながらそんなことを考えていると、同じ周波数で今度は音声での通信が来た。

？「こちら竜宮島、そちらの機体はグルンガスト、搭乗者は紅真叉斗さんで間違いありませんか？」

「ああ、おれは紅だ。そっちは？」

？「申し送れました。私は竜宮島の管理をしております、KOS -
コスモス
MOSと申します。マスター」

事情を聞くと、この島とKOS - MOSは神様の仕業らしい、曰く
「拠点が無くちゃ何も出来ないだろう？」だそうだ。

機体を着陸させるため、ビーコンを出してもらい島の地下施設へと
向かうとそこには巨大な空間が存在した。って、これ島の数万倍あ
るんじゃないか？

グルンガストから降りると目の前には正しく、ゼノサーガに登場す
るKOS - MOSが出迎えてくれた。

K「お待ちしておりますマスター」

「ああ・・・うん」

K「？ マスターあちらに機体はいかがいたしましたしょう」

彼女の目線の先には、俺が運んだ不知火があった。

「そうだ！あの機体にはまだ生存者がいるんだ、通信に反応が無か
ったけど、生きているはずだ」

K「了解しました。それでは救出作業に入ります・・・ポチッと

な
」

《ハロハロハロ》

なんだか某有名悪役のセリフと共に数十体のハロが転がり出てきた。

K「彼等に作業させましょう。お願いしますね」

ハ1「ハロハロ」

ハ2「オマカセ！オマカセ！」

ハ3「テヤンデー！ベラボウメ！！」

ハ4「ケケケ、キリキザンデヤル！」

ちよつとー！ー！ー！一体ものすごく野蛮なこと言ってますけどー！
ー？！

K「これで安心ですね」

「いやできないって！一切安心できないよ、特に最後のヤツ」

K「最後・・・、問題ありません。彼女、『ハロゼロ』は物騒な言葉使いと解体作業の手際は全幅の信頼が置けますから」

「いや何その名前？！明らかに悪意ある名前だろ！ドSロリババ子

猫吸血鬼の流れ来てるだろそれ?！」

K「ちなみに八口たちの製作者は、この基地の技術開発部長のエヴァさんです」

「名前もろ?!」

K「因みに20歳ですが見た目10歳なのが悩みなようです」

「ドストライクーーーー!!」

神デメー、一体なにがしたいんだ!? へ幼女万歳♡ブッコロ!
俺が神との話(傍目には悶絶)を不思議そうに見続けるKOS-MOS、はずかしい・・・。

K「? ああそれと、神からの手紙になります」

KOS-MOSから手紙を受け取って早速読むことに。

《カサガサ・・・》

「ん?どれど・・・れ・・・」

やあ、紅きゅん！

グシャグシャグシャ！！

はい、1行目でイラつとした俺は正しいと思います。
反射的に手紙はピンポン玉ぐらいの大きさに丸めました。

K「マスター、それでは手紙を渡した意味がありません」

「しょうがないじゃん！あれ見たら誰でもやるって！」

そんな俺の反論を聞いた彼女は「やれやれ」と残念そうな人を目にしたような反応をする・・・ナニコイツ。

K「こんなこともあるのかと、動画ももらってあるので」「ならこの手紙は？！」・・・ネタだそうです」

あの駄神・・・。

K「では再生します」 ピッ

「.....」

「.....」

天「ちょ、神様始まってますって!」

「フオ!? な、なんじゃと! は、早く言わんか」

天「な?! 神様が『ワシにかかれば一発撮りなど御茶の子さいさいじゃ!』とか言ってるハ無しにしたんじゃないですか!」

「なんじゃその言い方は! ワシは神じゃぞ! 一番偉いんじゃぞ!」

天「この耄碌爺! 私がいなければ貴方なんて三日ともたず仕事を投げ出すくせして.....!」

「なんじゃとこの.....」

15分後

「そんなんじやからピー歳にもなつても独身なんじや！この生き遅れ天使g 「ナンドト・・・」 ひょッッ」

天「キサマ、言ッテハナラナイ事ヲ・・・」

「ちょ、おま、なんじやそのバツトは、棘だらけではないか?!」

天「ピピルピルピルピルピル」

「いやマジすみません、助けてください！そ、そんなので殴られたらワシ死んじやう!・・・。」

天「・・・ギルティ（有罪）」

ギュルルルルウウ

「え、なぜに回転？ほんとまっってください」

ドルブルルルウ

「や、ヤベてください・・・削れる、ワジげずれじゃぶ・・・」

グシャ、ヴェルブブ

「ほ、ぼつぶびべぶ・・・で、だんですきのがまえを・・・べ？
ばっべ、むじ！ばじでげづはb 「貫ヶ、エスカリボルグー！」
アーーーーアア・・・」

ザーーーーーーー

ザーーーーー

ザー

K「というわけで、こちらが天使様からの手紙です」

「今の映像は?!」

第六話 「神様だって生きている」(後書き)

短いね、ってか音描写いらないかな？

どうおもいます？

あと、機体はなるべく超自然科学的なものは控えるつもりです。

*サイバスターとかの魔や気などで動く機体。

でも龍虎王は出したい衝動に駆られています。あと修羅系。

・・・どうしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4142/>

Muv-Luv 死亡フラグをぶっ壊せ！

2011年12月6日19時46分発行